

西田幾多郎と鈴木大拙——親鸞という交差点——

木村 宣彰

西田幾多郎と鈴木大拙とは、いずれも余人をもつて換え難い偉大な思想家であり、その両先生の間を比較することは容易ではない。そこで「海の人」と「山の人」という視点から両先生の生き方を考えてみたい。

明治三年（一八七〇）、西田幾多郎と鈴木貞太郎（大拙）は同年に生まれ、やがて石川県専門学校（後に第四高等中学校に改称）に学び、そこで相知って生涯の深い交わりが始まった。西田と大拙はそれぞれ独自の思想を形成するが、西田の哲学思想と大拙の禅思想との間には相互の共鳴関係が認められる。それは晩年になるほど強くなったようである。西田の「絶対矛盾的自己同一」と大拙の「即非の論理」、或いは西田の「逆対応」と大拙の「妙」、西田の「場所」と大拙の「大地性」なども対応する。このように生涯の心友であった両先生は思想的にも共鳴し合っていた。両先生は同時代に生きて同じような課題の下

で思索し、それが禅経験と結びついているため、類似の思想が生まれても不思議ではない。しかし、西田と大拙とは共に一家を成すが、それまでの歩みは必ずしも同様ではない。むしろ両先生の精神形成期の生き方はかなりの相違が認められる。

明治初期の青年層には、立身出世のための勉強は富貴を得る資本であった。西田は東京帝大に入学したが、本科生に比して選科生の惨めさを嘆いている。その後も納得する職が得られなかった。三九歳で学習院の教授に就任し、翌年に京都帝大に職を得て研究に専念する。一方、大拙は西田に勧められて東京帝大の選科生になるが修業せず、専ら円覚寺で釈宗演の下で参禅に励み、立身出世とは無縁の生活を送った。大拙は釈宗演の勧めで渡米し、明治四二年に一二年ぶりに帰国して学習院の講師に就任し、翌年に教授となる。明治四三年には西田も大拙も共に学習院の教授であった。明治四三年度版の学習院教授一覧で

は、それぞれの氏名の上に爵位や叙位などの「位」が冠せられている。独語の西田幾多郎教授は「正六位」であるが、英語の鈴木貞太郎教授はまったくの無位である。

晩年に両先生は鎌倉に居を構えたが、西田は「海」の近くの稲村ヶ崎に、大拙は松ヶ岡の「山」に住む。大拙は「自分は山が好きだが、西田は海が好きだ」と語っている。西田は「私は海を愛する。何か無限なものが動いているように思うのである」という。この相違は両先生と親鸞との関わりにも認められる。『教行信証』に依れば、親鸞にとって海は「一切苦悩の群生海」であり、如来の「功德の大宝海」でもある。親鸞の『教行信証』における「海」の解釈は西田の「逆対応」や「場所」に通底する。

西田も大拙も共に北陸に生まれ、親鸞の浄土真宗的風土の中で生まれ育った。大拙は五一歳で学習院から真宗大谷大学に移り、そこで『日本の靈性』や『浄土系思想論』などを著し、親鸞について深く考えた。大拙は『歎異抄』にみられる親鸞と「よきひと」法然とを「日本の靈性」の自覚者として「一人格」としてみなしている。恰も大拙と「大拙」の居士号を与えた釈宗演との関係に匹敵する。大拙は「靈性」の目覚めを「大地性」と捉え、その大地の象徴が「山」である。

『論語』の雍也篇に有名な言葉がある。「知者は水を樂たのみ、仁者は山を樂たのむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は樂たのしみ、仁者は、壽いひながし」と。これは「水（海）」を愛する知者と「山」を

好む仁者との間に優劣をつけるのではなく、優れた人間の二つのタイプを示したものである。海を好む「知者」と山を好む「仁者」とは、西田幾多郎と鈴木大拙とに親炙し、聲咳に接した人々の語る両先生の人格に一致するように思われる。

(きむら・せんしゅう、仏教学・中国仏教思想史、

大谷大学名誉教授)